
穏やかな彼

ジャンガリアンハムスターは世界最強種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穏やかな彼

【Nコード】

N2689U

【作者名】

ジャンガリアンハムスターは世界最強種

【あらすじ】

恩田貴美子（26歳）独身。イケメン・エリートの穏やかな彼からプロポーズされました。直接的な行為の描写はありませんが、時々セリフ等に不謹慎な言葉が出てくるため、R15。

穏やかな彼からプロポーズされました

「預金通帳とカードを私に預けてくれて、

お小遣い制でもOKで、

『キッチンに男子入るべからず』なんて言語道断。

家事は、気付いたときには率先してやってくれて、

浮気は、プロのおねーさん相手なら申告するなら不問。

だけれど、しろーとに手え出すなら、1回でも許しません。

暴力反対で、私に対して手を挙げるようなら、即刻 出て行きます。」

と、ここで相手の目を覗いてみる。

ふむ。

ポーカーフフェイスだなあ。

いまいち何を考えているのかよく解からん。

「それでも宜しければ、喜んで。」

ニツコリと笑って、続けてそう言った。

すると、藤原さんは口角をあげて微笑み、こう返した。

「浮気は絶対に禁止。

キスやセックスは勿論、男と二人きりで食事や出かける時は僕に話すこと。

セックスを誘った時は、断らないこと。

やむを得ない理由があるときでも、素股か口か手ですること。

夫婦喧嘩しても、一緒に寝ること。

外出の時は、露出の多い服は控えること。

それでも宜しければ、結婚して下さい。」

あれ？

何かおかしくない？

一体何故こうなった？

穏やかな彼からプロポーズされました(後書き)

誤字・脱字等ご指摘宜しくお願い致します。

共通の趣味は、食べ歩き

申し遅れましたが、私は 恩田 貴美子と申します。
現在26歳。独身。

趣味は、食べることに。

料理の専門学校を卒業後、某チェーンホテルの厨房で料理人として働いている。

と、いつてもペーパーの私である。皿洗い・掃除係から始まり、野菜の皮を？いたり刻む仕事から、サラダを任されるようになるのに3年。そこからスープ・前菜係へと移行し、最近やっと板についたきたものである。

私は、平平凡凡の人間である。

いや、別に卑下しているわけではなくね…。

顔立ちは10人並みだし。

身長は165cm、体系は、ぽっちゃりさんである。

只今、目の前にいる相手は藤原 武人さん。

会社の先輩でもある。

ホテルの渉外担当をしている。語学堪能な彼はそれを活かしてマーケティング部とタッグを組み、海外への営業にも彼の仕事ぶりが発揮されているとか。海外のヤングトナキ方たちをはじめ、世界中のエグゼクティブもステイするホテルですからね。彼の能力は内外ともに評価されているんだろうなあ。

元々、出身も出身で、出世は間違いない人だ。

私も165？あるので低い方ではないが、彼は、私よりさらに身長がある。180cmはありそうだ。肩ががっちりしており、スーツ

をすらすらと着こなし、常に周りの注目を浴びている、とても、ハンサムな人なのだ。
自信というか、オーラが漲っている。

私のような一般庶民とは、職場は同じという以外は縁のない人だった。

彼との出会いは、友人の結婚式だった。

同期の山下佑子ちゃんの結婚式に、藤原さんも新郎友人として来ていたのだ。

佑子ちゃんは、4大卒なので私よりも2歳年上だったが、同期入社で研修グループが一緒になり、友達になった。さらに、お互いの趣味が食べ歩きという事もあり、本当によく一緒に出かけていた。

彼女は、フロントの仕事をしている。本当に可愛いふわふわした外見だが、性格は明るい姐さんタイプ。スレンダーだが健啖家である。そんな親友の結婚を嬉しく思う反面、なかなかこれからは二人で遊びに行けないな、と寂しく思う。

と、そんな食い意地の張った話をしていた時に、藤原さんが尋ねてきた。

「恩田さんは、付き合い合っている人いないの？」

「はい、でも私は一人ラーメンも一人牛丼も平気なので、これからは、「俺じゃ駄目かな」

「え？」

藤原さんも、趣味・食べ歩きなの！？

「俺じゃ駄目かな？恩田さんと付き合い合っつのは」

「いえ、そんな。じゃあ、お願いできますか？」

と、お互いの連絡先を交換した。

以後私たちは食事一緒に食べたり、遊びに行ったりする仲になった。当初、社交辞令だったのでは？とか、多分私の地味な性格に嫌気がさしてくるだろうな、とか考えていた。

が、話してみると、どうしてどうして。

穏やかで、話題は豊富で、ユーモアもあり、だからといって私の話もきちんとしてくれる。

美味しいものを食べることが本当に好きで、私と頻繁に会ってくれ（しかも、連絡をくれるのは彼が多い！）性格まで良い方でした。また、彼はほとんど毎回奢ってくれる。これには驚いて即お断りしたが、彼は断固として譲らなかつた。3〜4回押し問答を繰り返した結果私が折れた。ただ、喫茶店などでは私が奢ったり、ときどき手作りお菓子（彼は甘党だ）やおかず等の料理をお土産に渡し、出来る限り相殺しようとした。心がけた。

藤原さんは、人間としてとても魅力的だった。

私は、どんどん彼に惹かれていった。

今日も今日とて、重なった休みの日を利用して、美味しいロシア料理屋さんに連れて行ってもらった。

わざわざ予約してくれたみたいで、個室でゆったりとした会話と食事を楽しんだ。

食後、私はロシア紅茶を、藤原さんはコーヒーを飲んでいた。

なんとなく、会話が無くなり黙っていると、藤原さんが下を向いたつきり微動だにしない。

ん？

テーブル見たまま動かないぞ？

具合でも と、心配になり声をかけようとした 瞬間、

突然顔をあげる。

真剣な表情で私の目をとらえ、言った。

「恩田貴美子さん。」

僕と結婚していただけないでしょうか？」

とな。

共通の趣味は、食べ歩き（後書き）

誤字・脱字等のご指摘宜しくお願いします。

ダイヤモンドは4月の誕生石

いや、プロポーズされたのは、すごく・・・すっごく嬉しいんですけど。

驚きと、恥ずかしさで一杯になる。

（友人として）お付き合いしてみても、見た目のかつこよさだけでなく、感情のムラの無さ、面白さ、優しさなど内面にもとても惹かれて、自分の気持ちは恋心だと気付いたのは最近。

この人となら、私はどんな嫌なことがあってもやっつけていける。背中を合わせて戦っていけるなあ、と思っていた。

恋愛初心者の私は、友人関係を壊してしまうのが怖くて告白なんて出来るわけがなかった。

初めて男性とお付き合いしたのは、中学3年の時だが結局は1年後に振られてしまった。そのことが私を恋愛に臆病にさせており、性格はペシミストで、うじうじしている。平均より縦に長かったり、横に太かったりで、外観も異性から好かれるタイプでは無い。

一方彼は、本当に女性の扱いが上手だった。

私の恰好を褒めてくれ、気を使ってくれ。一緒に歩いている時、周りの女性の視線を感じる事が多いが、彼はそういう意味で他の女性に目を向けたことは一切無かった。過度に触れてくることは全くない。人ごみの中では、向こうが手を差し出し、私に手をつなぐか選択権までくれる。実家暮らしの私の家まで、車で送ってくれたりもする。

最近はおでこや頬に挨拶のキスをしてくれるほどフランクになった。（さすが、涉外担当だけある。）

真剣にお付き合いを申し込まれたよう！
いや、これはもしかして私をからかっているんじゃない。
これは冗談ですよ？とも思うが、真剣な顔だったし。

よし！

相手の出方を見てみよう。

私の知っている藤原さんは、とても穏やかで、それに穏やかで、
まは穏やか・・・なのに！！！！

返事がやけに下半身事情ばかりだったなあ。

露出が多いのはダメって、この場合はどういう意味だろう。

普通は、「君を他の男の目にさらしたくない」という意味だろう。
いやいやいや。

それとも私仕様で、「ぼっちゃりなんだから自重しろ」ということ
だろうか。

多分、彼の返事は冗談だったのだと結論が出た。

今日は偶の休みで、昨日まで連日仕事漬けだったと聞くし。

いや、だってそうでしょう。藤原さんは29歳の働き盛り、イケメン、エリート、なんですよ？

佑子ちゃん情報によると、社内の女性社員は勿論、お客様からもアピールされることも有り。

顔広いし。お付き合いで、クラブやごによごによにも詳しくそうだし。もしかしたら、これは、私からの告白に対する先制パンチだったのかも知れない。

「お前から告白されても迷惑だから」的な。
私が、藤原さんに惹かれている事に気付いていたんだな。

藤原さんが、立ち上がる。

この話はここでお終い。ということらしい。

少なからず傷ついた気持ちに蓋をし、私も立ち上がるうとした。が、その時には藤原さんが私の前で膝を付き、騎士さながらのポーズで箱を取り出して眼の前に置いた。

薄水色の箱　それは！！

私はゴクリと生唾を飲み込み、箱からケース取り出し、開けた。
ダイヤモンド。

この会社独自のカットとセットの仕方です光を調節し、ダイヤモンドが最も美しく見えるようになっている。

藤原さんの顔を見てみると、彼はいつもの穏やかな顔をしていた。
藤原さんが指輪を取り出し、私の左手の薬指にはめる。

ピッタリだった。

ピシヤ　　ンツツツ！！！！！！

私は、まさに雷に打たれたような衝撃をくらった。

本気かああああああああああああああ！！！！！！

「俺の条件は飲める？」

「あ、はい」

「良かった。ありがとう！」

「えっと。私が最初に出した条件は、良いんですか？」

「うん。いいよ」

「夫婦のお財布を一つにするぞ、って言っているんですよ？」

「そうだね」

「……」

「貴美子ちゃんの条件は、何だか俺が浮気することが大前提だったね。」

あれ？

何か穏やかな笑顔がこわい。

結婚を前提にしたお付き合いが始まりました

しまった！怒らせてしまった！！
違うの！！！！

「身体の浮気ok」なんて、言うんじゃなかった！
あまりに…あまりなので、思考が上手く行かない。

「お互い、他に言いたいことは後で詰めるとして……。いつにしましようか？」

「えっ！？」

「身内で挨拶を交わしたら、先に籍を入れましょう。」

籍を1年後、式はそれより1〜2年先つてところかな。
初対面から4カ月目だから、まあ、妥当なところだと思う。

「はい！」

どうか、不束者ですが宜しくお願いします。」

結局、私たちは4カ月後の4月に籍を入れることにした。

4月に私の誕生日があるからだ。式は暫く先になるのが確実で、「そんなに待ってられない」と言われ4月に決定。夏に出会ってから、まだ数カ月のスピード婚だ。式は、私の家はいつでも都合がつくが、藤原さんはそうじゃない。うちのホテルあげてのお祭りになる勢いである。ご両親にご挨拶にいったり、本当に忙しくも、毎日楽しく過ごしていた。

あまりの電光石火の早技ぶりに、私の両親から「子供ができたのかっつ！！？？」と驚かれるかと思っていたが、そんなことは全くなかった。

そういえば、以前『食べ歩き会』が早めに終わり、私を実家に送ってくれた時両親と会ったことがあった。

「藤原 武人と申します。貴美子さんとは会社の同僚でして、今後ともよろしくお願い致します。」

私は、家に男の友達を連れてきたことなぞ無かったんで、同じ空間にいるというだけで恥ずかしくて、何気ない口調で続けた。

「藤原さんは、事業推進課の課長補佐をしている人なんだよ。今日は、宇都宮までギョーザを食べにいったの。おみやげも買ったからね」

仕事バリバリできる人なんだよ！美味しいものが大好きな私の友達なんだよ！と社会的地位且つ性格的健康性を私なりにアピールしてみる。

「まあ、わざわざ。貴美子の母です。」
「貴美子の父です。」

両親は、藤原さんの美男子っぷりに驚いているようだった。後でどれだけ冷やかされるかと思っていたが、母は「いい男じゃない」と一言だったし、父は何も言わなかった。

今思うと、奥手の私が、友達と言えど男の人を連れてきたので気付いたんだろっな。

お付き合いが始まって、藤原さんは、私に過度な接触をすることも無く、親切だった。

順番を守ってくれ、私のおこちゃまデートを嫌な顔せずにつき合ってくれていることが、とても嬉しかった。

本当に大切してくれているのが分かって、嬉しくって、幸せを噛みしめていた。

ドライブを楽しんだり、映画を観に行ったり、ご飯を一緒に食べた。

恋人になった今は、私から手をつなぐ位のスキンシップは出来るようになった。

結婚を前提にしたお付き合いが始まりました（後書き）

出会は、7月後半～8月頭

プロポーズが12月頭（現在地）

籍は4月にいれる予定

鉢合わせ

婚約して数週間たったある日。

私は仕事が早番で夕方には家いた。

すると田舎のおばあちゃん家から、リンゴが届いていた。

そうだ！藤原さんにタルトタタンを持っていこう！

私は、夕食を食べながら、早速タルトタタンを作りはじめた。

藤原さんの家につきチャイムを押してみるが誰もいない。

中で待たせてもらおうと、合鍵を使いおじやまする。

婚約者だから当たり前だが、合鍵をもらった時は恥ずかしいとの嬉しいので頭が一杯一杯だった。

それと、「家に女の子を入れるのは初めてなんだ」と言われた時は、照れて笑ってしまった。

彼の家は、会社寮のワンルームマンションではなく、3LDKの賃貸マンションだった。

キッチンに入り、途中スーパーで買ったバナナアイスや貴腐ワインをしまい、カウンターにタルトタタンを置き、ソファで本を読みながら藤原さんの帰りを今か今かと待っていた。

どのくらい時間がたったのだろうか。

私はソファでうたた寝をしていた。

今は何時だろう？となかなか冴えない頭で考えていた時に、鍵がチヤッと鳴る音と足音と話し声が聞こえた。

この部屋の前で、足が止まる。

話し声が聞こえる。

何をしゃべっているかまでは分からないが、もう一人が、女性だ、
という事は分かった。

彼は

「家に女の子を入れるのは初めてなんだ」
と言っていた。

カチャ、と音がした。

「どうぞ」彼の声が聞こえる

「おじやましま〜〜す」
可愛い女性の声が続いた。

全身が強張った。

身体が熱い。

心臓がドツドツドツと五月蠅い。

「スリッパ履いて」とか「あら。ありがとう」とか、
こちらに歩いてくる音とかを聞きながら私は腹を決めた。

廊下と居間との扉があいた。廊下の光が入り二人の姿が眼に入った。
私はソファから立ち上がり

「お兄ちゃん!!!」

と彼に笑いかけた。

うじうじの彼女

藤原さんの顔は、逆光で良く見えない。

私は、頭を下げて（二人を直視できなくて）

「お兄ちゃんごめんなさい！勝手にお邪魔しちゃって！

おねえさんもごめんなさい。」

と、おそるおそる女性の顔を見た。

美人だった。

すらつと背が高く、均整のとれた身体付き。

瓜実顔のとても綺麗な輪郭に、ぱつちりの眼。通った鼻筋。魅惑的な唇。

エキゾチックな色気のある雰囲気醸し出している大人の女性だった。

私を見て、大きな瞳を更に大きく見開き驚いていたが、私のセリフで「ライバル」ではないと分かったのだらう。微笑んでいる。

負けた。

というか、勝負にならない。

自分が惨めでしょうがない。

のろのろ時計を見てみると、23時近かった。

私は近くのコインパーキングに車を止めており、終電を気にする必要もないが、彼女はそうじゃないでしょう？

二人の手に握られているコンビ二袋の中は明らかに酒類とツマミで、「2次会は俺の部屋で」という状況ありありだった。

「じゃあ、私は帰るねっ」

バックを持ち急いで立ち去ろうと二人の間を突っ切ろうとした。

その時

藤原さんと目が合う。

今までに見たこと無いような冷やかな能面だった。

私は、ショックだったし、怒っていたし、傷つけられたとも思っていたし、

何より「嗚呼。やっぱりな」とも思っていた。

高校生の頃と少しも変わらない。

中学生の時、クラスメートの男の子に告白され、初めての彼氏が出来たのが3年の時だった。

お付き合いといっても、一緒に帰ったり、修学旅行の時同じ班に、というものだった。

高校、私は進学校に彼は商業高校に進学した。

私は、恋愛しにくい体質で、彼が初恋だったし、初恋が両想いになったことで浮かれてもいた。恐らくずっと彼と付き合い合っていくだろうと思っていた。

そして、高校1年の夏休みに彼が同じ高校の女の子とお付き合いしているという事を共通の友人を通じて知り、初めて自分は振られたことに気付いたのだった。

あのころから、少しも変わっていない。

嗚呼。このままでは駄目だ。

このまま藤原さんに会うことも出来なくなっ

うじうじ悩んで、

傷つけられるのが怖くって、二度と恋愛なんかしないんだからって
殻に閉じこもって、

私は恋愛なんて出来ないんだって諦めて、

自分を卑下して生きていて それで私は満足なの？

藤原さんと結婚するって決めたのは、幸せってだけじゃ無い。

この人となら、どんな苦労も耐えられるって。

そう思ったんじゃないの？

まさに

『病める時も、健やかな時も』じゃないの？

手足が震える。

身体が、目頭が熱い。

既に私は、涙を堪えることが出来なくなっていた。

鼻水が垂れそうになるのだけを堪えて啜りながら、強引に両腕を彼
にまわしてしがみついた。

「やっぱり嫌だよ！」

藤原さんが大好きなんだよう！

別れなくないよううとうとう！」「

力で敵うわけないのだが、引っぺがされるのは嫌だったので力の限
り彼にしがみついていた。

ギョッ

次の瞬間。

痛いくらいの力で抱きしめられた。

ドットドットドットドット

私の心臓の音だろつか、それとも彼の？

早鐘のような心音にお互い冷静では無いのだと思った。

密着しているので、お互いの熱を感じた。

やがて腕の力は弱まり藤原さんは私の首元に顔を沈め、片方の手は、

背中を撫でてくれる。

抱きしめられるのが気持ち良い。

背中を上下する温かい手のひらが優しい。

暫くそのまま抱き合っていた。

しだいに私の涙がおさまってきた。

藤原さんの腕が緩んだので、顔を上げて目を合わせる。

私は照れながら笑い、彼はふわつと笑った。

感情を吐露することも大切です

「ちよつとお！」

私がいること忘れてんじやないわよ」

おねえさんのプリプリとした声が聞こえた。

顔を向けると、綺麗な顔を私に近づけながら、

「貴女が、貴美子ちゃんね。はじめまして。

私は武人のおねえちゃんなの。何か誤解させちゃったみたいねえ」

藤原さんの頭を拳でグリグリしながら、フフフと笑って言った。

「いや、『おにいさん』だろ」

藤原さんが（ため息をつきながら）訂正をした。

「やだあ。武ちゃん！それは言わないでえ〜〜！」

おにいさん。

『武人のおねえさん』じゃーなくっっておにいさん。

あああああああああああああああ？？？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おにいさん？

男の方なんですか？

えっと、でも・・・」

私は思わず、マジマジツと美人さんを見た。

確かに、スタイルは良い。と、いうか、武人さんと身長同じくらいだから良すぎか！

コートの上からだか、胸ありますよね？声も高いし！

耳で聞いても、脳が上手く処理してくれない。理解が出来なかった。こんツツな美人が男の人なの！！？？

「藤原 伊織っていうの。」

イオリンって呼んでねっ。フフフッ」

私たちは、居間でタルトタタンと貴腐ワインを味わいながら（私はコーヒーで）改めて挨拶をした。

伊織さんは、武人さんよりも5歳年上の34歳（独身）。男性である。

そもそも性同一性障害ではなく、女装が趣味らしい。

地声も男性にしてはもともと高いほうだが、女装姿の時は頑張って可愛い声を出しているとか。

「仕事は何をしてらっしゃるんですか？」

「調律師なの。ピアノのね。まあ、楽器メーカーの契約社員もやっているからドイツに住んでいるんだけどね。」

あっ。おみやげがあるのよ。ちょっと待ってて」

とって奥の部屋に取りに行ってくれた。

嬉しいことに、お土産としてシュト レンやらトルテやらバームクーヘンやらを頂いた。

その後、伊織さんは部屋に休みに行き、私と藤原さんは居間に残った。

藤原さんに向き直る。

この人はいつつも落ち着いていて、感情にムラが無かった。

声を荒げたりすることが無かった。

喧嘩になる前に折れてくれるし、

私が感情的になっていたりするときも黙って聞いてくれてその時のことを後になって蒸し返したりしない。

穏やかで、理性的で、

言葉は優しく、

本当に私を大切にしてくれているって思った。

だけど、あの時の煮えたぎるような目つきで私を見た、あの眼。

抱きしめられたときの熱。

腕の力。

伝わってくる早鐘のような心臓。

私の腹部に押しつけられた彼の興奮。

優しさだけじゃ足りなかった。

穏やかなだけじゃ不安だった。

ピースが全部埋まってはいたジグソーパズル。

でも、

立てたり、叩いたら崩れてしまうジグソーパズルで、私は怖かった。

感情が糊になって、固めてくれた。

もう大丈夫。

ちよつとやそつとのプレッシャーじゃもう崩れない。

今日を、明日を、毎日を楽しもう。

過去に囚われていたら、人生が逃げてしまう。

私は、彼の右手をとる。

手の甲

指の付け根にくちづけた。

感情を吐露することも大切です（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございます。

誤字・脱字等ございましたら、ご指摘宜しくお願い致します。

友達は大切に（前書き）

視点切り替わります。

ヒーロー視点。

いささか、品の無い所もあります。

友達は大切に

彼女との出会いは、友人の結婚式だった。

友人の辻 忠司の結婚式に、恩田 貴美子も新婦友人として来ていたのだ。

ぶっっちゃけ

「派手な美人」

が第一印象。

まず、胸でかい。

背が高い。

ヒールを履いているから、元々高い身長がさらにすらっと高い。

痩せてはいない。だが、決して太っているわけでもなく、全体的に柔らかな感じ。

鼻が高く、目が大きく、くっきり二重瞼の、綺麗な顔をしていた。

黒髪ロング、色白で、綺麗な鎖骨。

モロ好みw

2次会の時、ホテルに誘おう。

同じ会社の子らしいし、俺の事は知っているだろう。多分彼女は断らないだろうと思っていた。

式の間、神経は常に彼女を意識していた。

ふと、何らかの違和感を感じる。

友人代表で彼女が挨拶している時。

ケーキカットでカメラを構えている人だから中の彼女を見た時も。

何だ？

喉の奥に、骨が刺さったみたいだ。
何に「違和感」を感じてるんだ？

そのまま式は進行し、新婦が両親への手紙を読み始める。
なんとなしに彼女の方を見てみると、目元をはらっている！
両親への感謝の言葉、家族愛で感動しているようだった。
その時に、気が付いた。

あ、爪だ。

感じていた違和感の正体が分かった。

爪が綺麗なんだ。

彼女は爪を短く綺麗に整えており、ネイルを全くしていなかった。
だから、友人代表のとき彼女が山下への手紙を読んでいるときの手
元や、ケーキカットでデジカメ構えたときの手元に違和感を感じた
のか。

そして、いま、父親への感謝の言葉で泣いている。
なんだか、かわいい人だなと思った。

2次会は、近くのレストランを貸し切つてやる。

辻と山下を車で連れていくとき、山下に彼女のことを聞いてみた。

「恩田ってうちの会社だよな？どこで働いてんの？」

恩田貴美子とは、いままで一面識も無い。

山下は、フロントで受付をしているから良く見かけたり、辻の彼女
ということもあり、飯と一緒に食う時もあった。

「貴美子は、調理場だよ。なに？興味あんの？」

今夜落とす予定です。

料理人ね、道理で爪を綺麗にしている。

「いや、一度も会ったこと無かったから」

「やめてよね。貴美子は藤原さんが遊びで手え付けていいような子じゃないんだから。」

遊びって決めつけてんのね。

どーゆー意味よ。

「藤原。貴美子ちゃんは、真面目なタイプなの。俺もやめといた方がいいと思う」

辻まで俺を牽制する。

つか、お前「貴美子ちゃん」って何？何名前と呼んでんの。

「貴美子と付き合っんなら、『俺が幸せにしてやる』位の気持ちでいてね」

「はあ？何？それ？」

「真剣なお付き合いで、ってこと」

何この屈辱。お前ら言いすぎじゃね？

何で、俺がチャラ男っぽく言われてんの？

言っておくが、俺からナンパしてる訳じゃ無いぞ。女の方から声かけてくんの！

第一、付き合ってみなきゃ『合っ』とか『合わない』とか分からないと思う。

YES!!! YES!!! YES!!!

2次会のレストランですぐ彼女に意識が向かう。
いた。彼女だ！うちの会社の子と話している。

山下が彼女たちのところへ向かっていくのを幸い、俺もその輪に加わった。

挨拶を終えたところで彼女をじっくり見てみる。

本当に好みのタイプだなあ。

俺の言わんとしている冗談を読みとって、優しくからかってくれたり。

打てば響くような事を言うと思いきや、彼女独特のユーモアで斜め上の切りかえしをする。

こんな賑わっている所じゃなくって、静かなところで、二人で話したい。

もっと一緒にいたい。

俺が新郎の辻とのエピソードを話したり、彼女は山下とのエピソードを面白おかしく話してくれる。

どうやら食べ歩きが好きらしい。

これは、チャンスじゃないか？

「いつも、二人で？」

「そうですね。」

休みの日とかは、二人が多かったですね。

でも、仕事帰りは、辻さんと3人で夕飯一緒に食べたりしていました。」

辻てめえええ！！知らなかったぞ。

誘えよな!!!俺もっ!!!

二人は同棲しているから、気晴らしも兼ねて休みの日は女同士で遊んで楽しんでたんだろう。

「でも、ちょっとこれから気を使うね」

「あはははは！そうなんです。

野暮なことはしたくないで

すから。新婚さんの邪魔にならないようにします。ちょっと寂しいですけど。」

「恩田さんは、付き合っている人いないの？」

さつき、山下に間接的に聞いたけれど、こつ言う事は本人確認する。メアド・番号然り。

一目惚れに近いかたちで彼女に惹かれていた俺は、結婚も考えていた。

その前にお付き合いをして、もっとお互い知る必要がある。

「はい、でも私は一人ラーメンも一人牛丼も平気なので、これからは「俺じゃ駄目かな」

「え？」

失敗した。凄く真面目な子なんだよな。

初めて会った日に告白するって気が早すぎ？

「俺じゃ駄目かな？恩田さんと付き合つのは」

「いえ、そんな。じゃあ、お願いできますか？」

やった!!!

マジ、辻感謝！山下感謝！友達でいてくれてありがとう！

Yes!!!Yes!!!!Yes!!!!!!!

俺たちは晴れて恋人になった。

まだ、彼女は俺に対して距離を置くようなところがあったし、遠慮していることもしばしばあった。

が、一緒にいることに緊張していることはなく、お互いにこの時間を大切にしていると感じていた。

俺は、周りから、世間でいうところの『お金持ちのボンボン』で見られており、親しい友人間では無いが、色々な場面で奢らされる側に立つ人間だった。（時には年齢が上の方達より、多くお金を出すことを強要されていた）

なので、支払いの後にお金を渡させた時は吃驚した。その時は何とかおさめさせたけど、2回目のデートで彼女が伝票を掴んでサツと会計に行ったときは、更に驚いた。（自立している女性なんだな）それから、時々彼女の方がケーキやお茶を奢ってくれたり、いつも美味しいお菓子や料理（彼女の手作り！感涙）を持たせてくれるのが本当に嬉しくて、嬉しくて、もう絶対に彼女と結婚すると決めていた。

彼女は実家に住んでおり、デートの帰りはいつも玄関まで送るのが暗黙のルールになっていた。

結婚が前提な俺としては、慎重に慎重に進めたかったので、どんなに遅くても22時には、彼女を実家に送り届けてご両親に『誠実さ』アピールをしていた。

それに、比較的早い時間に送り届けた時は、ご挨拶もさせていた。いた。

「藤原 武人と申します。貴美子さんとは会社の同僚でして、今後ともよろしくお願い致します。」

「藤原さんは、事業推進課の課長補佐をしている人なんだよ。」

今日は、宇都宮までギョーザを食べにいったの。おみやげも買っ

てきたからね」

「まあ、わざわざ。貴美子の母です。」
「貴美子の父です。」

彼女から、俺のことを聞いているかどうかは分からないけれど、『同じホテル』、『30前後で事業推進課 課長補佐』、『藤原』で俺の身元保証が少しでも担保できれば良かった。

お義父さんの方は気がついたみたいで、俺をマジマジを見つめていた。

内心ガッツポーズを取りながら、頭を下げておいとました。

コンプレックスは誰にでもある。しかし、それを克服してこそホモ・サピアンマ
プロポーズを承諾してもらった！

お互いの両親のもとに挨拶したり、これから繁忙期のピークを向える前に、出来る限り会っておこうとデートをして楽しく過ごしていた。

それと同時期、ドイツにいる兄の伊織から連絡が入った。

婚約のお祝いと、クリスマス休暇で日本に帰ってくるので俺の部屋に何日か泊まりたいとのことだった。

うちの兄は、俺のコンプレックスの種だった。

第一に、俺の初恋のミサちゃんは、伊織に恋していた。

（「え？たけと君あたしが好きだったの？ごめんなさい。あたし、いおりさんが好きなの！」）

俺も、そこそこ顔は整っているが、伊織のそれは中性的で本当に美しかった。貴美子が、よもや兄に心変わりするとは思っていないが、一抹の不安は拭えない。奴の帰国ギリギリの時に紹介しよう。今はクリスマスで忙しいし、その後、納会や、長期休暇を利用してくる観光客など本当にゆっくりできる時間が無い。俺の行動は間違っていない！

第二に、俺の一族のほぼ皆、某有名大学に合格し社会に羽ばたいていく。

伊織も、文？に合格。進学したが、奴は何を思ったか、2年の頃「

やっぱり俺は音楽に生きる」と自主退学してしまった。両親や伯父叔母たちとすさまじい舌戦を繰り広げて、結局は平行線のまま、奴は家からおん出て、ヨーロッパに行ってしまった。

兄弟2人、仲は良かったので、あまりに急なことに、15歳の俺は本場にシヨックを受けた。鉄道会社を筆頭に系列にホテル事業会社を持つ、創業者一族・藤原家の長男が、勘当されたのである。うちの会社の後継者という重荷が、今度は俺に振りかかってきた。(俺は、補佐役としてお兄ちゃんを支えるんだ、と本気で思っていました、何が、何か?)

第三に、俺は志望大学に落ちた。一門の恥、出来そこないである。

伊織が自主退学した学校に、俺は不合格。

『ああ…あと一年浪人か…』と落ち込んだが、出来の悪い俺がまた来年確実に合格する保証はどこにもない!!いや、あれだけ勉強して落ちたし、出来そこないの俺は一浪、二浪・・・と時間をつぶして行くのが怖かった。

結局俺は「現役で合格した、国立の某経済大学に行こう!足を引張った英語のスキル(ヒアリングで惨敗した事は分かっていた)を大学で学ぶんだ!」と思い直し、進学先で必死に英語スキルを磨いた。

長期の休みの時は、外国へ行ってネイティブと交流し、学んできた。そして、滞在する外国のホテルで、悪い点、アイデア、サービスなど身をもって体験したことが、俺のホテル事業に就職した所以である。

第四に、奴はヨーロッパで華々しく活躍している。本職としての、

調律師はもとより、某ピアノ製造メーカーの契約社員をしており、業界では大変有名らしい。見事に一族の鼻っ柱をへし折り、いざ凱旋だ！と奴が帰国してきたのが数年前。

グイトンのスーツケース、エルメスのバーキン、シャネルのスーツ、マノロ・ブラニクの靴、茶髪のロングヘア、フルメイク姿を見て、「ウエルカム ツンドラ永久凍土の世界。グツバイ 俺の平穏な日々」と思った。（後日、茶髪のロングヘアはウィッグと判明）

結局、奴と家族の溝は、残ったまま。

伊織は実家から「その恰好をやめて、まともにならない限り家の敷居は跨がせない」と言われているので、日本に来た時は、ホテルか俺のマンションに泊まる。

コンプレックスは誰にでもある。しかし、それを克服してこそホモ・サピアン

サブサイトルは、川原泉『フロイト1/2』1996・白泉社文庫
収録の『たじろぎの因数分解』より。137ページ。

正しくは、下記の通り。

「誰にだって苦手なものはあるの。BUT！それを克服してこそ
ホモ・サピエンスでしょーが。でなきやサルだぜ」

築き上げたものは不断の努力、崩壊は一瞬

あいかかわらず、ふざけた格好（似合ってはいる）をしているが、元
気そうで安心する。俺のマンションにくると、ゲストルームに泊ま
っていく。

父親とはなかなか溝が塞がらないが、母親の態度は現在は軟化して
おり、夕方、3人で飯を食った。

母親は「武人が結婚するのに、長男のお前がそんな恰好でどうする
の」と伊織に言っていたが、俺は正直複雑な気持ちだった。

帰り道、奴が立ち止まって俺の顔をじつと見つめ

「押しつけちゃってごめんなさいね」

と謝った。

「いや。ちょっと聞いて。俺は伊織に『男の恰好しろ』とか『俺に
押しつけやがって』とか思って無い。俺は伊織の、頭の良さに嫉妬
しているし、音楽の才能を羨ましいと思ってるし、人生そのものを
凄いつて思ってる。でも、俺は自分の、出来の悪さをカバーする努
力や、伊織が感情的で自由な分慎重なところとか、仕事の面白さと
か、凄く貴重に思っている。今は、婚約もしているし、毎日楽しい
よ。」

伊織は、黙って聞いていた。

しばらく動かなかったが、突然、

「武ちゃん！偉いわぁ。武ちゃんは、本当に努力家タイプよねっ！おねえちゃん応援しているからね！！」
さああて、今日は飲むわよー！！オールよっ！！帰りコンビニ寄っ
てこつ。お姉様の奢りねっ！！」

と、抱きつかれた。

抱きつかないでもらいたい。それと、おねえちゃんって誰？
オメーは、心も体も男だろ！ストレートだろ！

その恰好は、反抗期がほぼゼロに等しかった事の、反動だろ！
俺明日も仕事なんだけど。

兄との新しい関係が築づけて気分が高揚していたし、

明後日は貴美子とデートの約束だと舞い上がっていたし、

部屋に電気は付いてなかったし、

貴美子の靴は全く気付かなかったので、

リビングのドアを開けた瞬間、貴美子が部屋にいて、拳句に

「おにいちゃん！！！」

と笑顔で呼ばれるとは思わなかったんだ。

そうか

つまり、そういうことなのか。

俺は、一生懸命やってきたつもりだった。

彼女を傷つけない様 慎重に、

言葉づかいに気をつけて、

過度の接触は怖がらせてしまうとスキシップを抑えるよう意識し、
頑張っているところを見せたくて、上司・後輩・同僚・取引先・お
客様には真摯な対応で、

仕事を人より3倍努力して、

ユーモアを含めた会話で笑いをとり、

驕った態度を決して見せず、

嫌なことがあっても、彼女が癩癩を起こしたときも、ニコニコ笑っ
て最後まで話を聞く。

彼女に『私は愛されている』と思われている と思ってい
た。

信頼してくれているとおもったのに

何を、勘違いしていたのだろう。

実際に、彼女は俺を、そのような人間だと思ってるのだから、もう
どうしようもないじゃないか。

婚約しているにもかかわらず、俺は浮気を楽しむ人間で、

尚且つ彼女は、訳も聞かず、怒りもせず、身を引いてくれる。

俺が築きあげたものは、必死になって築きあげてきたものだったのに
彼女に信頼されていなければ、何の意味もなさないではないか

「お兄ちゃんごめんなさい！勝手にお邪魔しちゃって！
おねえさんもごめんなさい。」

致命傷を与えて、俺の人生から出て行く
のを、黙って見ていた。

まさに、俺の横を通り過ぎようとしたその時、
貴美子の顔が クシャ と歪んだ。

「やっぱり嫌だよ！」

藤原さんが大好きなんだよ！
別れたくないようううううう！」

ギユ！！

柔らかい。

身体を押しつけるように、力を込めて抱きしめてくる。

ただ、照れ屋な彼女が、あまり自分から愛情を口に出さない彼女が、
今、この場で言った事はとても勇気が必要だったに違いないと思っ
た。

俺も、力の限り彼女を抱きしめていた。

築き上げたものは不断の努力、崩壊は一瞬（後書き）

居間は、暖房付けてます。

暖かくて、貴美子ちゃんはずとととしちゃったんですね。

大切な気持ち（前書き）

【注】視点がころころ変わります。

ヒロイン視点

ヒーロー視点

ヒロイン視点

途中の*を目安にしてください。

大切な気持ち

その後、

伊織さんはドイツに帰り、

私も彼も毎日仕事にせいをだして働いている。

1月下旬、休みが重なるように冬季休暇をとった。

結納を行ったり、久しぶりにゆっくりと過ごす計画だった。

デートの日、朝早く迎えに来てもらい築地に連れてってもらった。

私は初めての築地だった。

一まわりして欲しいものの目星をつける。その後、朝ご飯として某カレー屋さんでキャベツのどっさり乗ったカレーを食べる。

お腹が一杯になった所で、買い物スタート。

彼のマンションに帰り、一緒にご飯を作っていく。

彼は、魚介類を使ってちゃんこ鍋を。私は、刺身を切り分け皿に盛る。そしてデザートに取り掛かる。寒天や、白玉を作る。正月に余ったきな粉を入れたクリームあんみつを用意をする。

居間のテーブルに、携帯コンロと鍋をセットして出来上がり。

夕飯には早いけど、昼を食べていないので二人でご飯を楽しむ。

デザートは、もう少し時間がかかるので、小腹が空いた時に出そう。

お茶を飲んでいると、会話が伊織の話になる。

「伊織さん素敵な人だね！」

貴美子は、その後ちゃんと男の恰好した伊織と対面したが、普通だったな。

「うん。あと、実は、これうちの問題なんだけど、伊織と父親や伯父さん達 喧嘩中なんだ。」

「あの恰好のせい？」

「そう。喧嘩は大学辞めて、パリに行った時からなんだけど。その時はもう、『勘当だ！』って本当に深刻だった。俺は、メールやスカイプで時々連絡はとっていたんだけど、あの恰好は知らなくて段々、伊織がキャリア積んで、周りから評価されてくうちに、母がとうとう『実家に顔出しなさい』って。

それで、帰ってきたんだけど……。あの姿見て、うちの親父はおさまっていたはずの怒りが、再爆発。まあ、お互い意地張ってる所もあるけど……。」

それから、結婚式に伊織にも出席して貰いたいと考えていることなどを話した。彼女は、とても理解してくれて、何パターンか作戦を考えよう、と言ってくれた。

と、ここで、気になることを聞いてみよう。

「伊織に靡かなかったから、ホツとした」

「ああ！伊織さんと武人さん、兄弟で凄くもてたでしょ」

「いや、伊織は他校でも有名になるくらいだったけど。俺は全然

貴美子は、俺の何処が好きなの？」

「え？」

「俺の何処が良かったの？」

「どこだろう・・・」

と、腕を組み、考え込んでいる。

「どこかな？」

でも、武人さんがゲイでも、ネクロフィリアでも、アンドロメダ星雲から来た宇宙人でも、好きなの。まあ、そうじゃない事はあるがたいと思うけれど。」

ほらね。

彼女はその独特のユーモアで、俺の斜め上の答えを出して
いとも簡単に俺を捕らえるんだ。

「あの時、大好きって言うてくれてありがとう」

彼が微笑んだ。

真近で見るのは、まだ照れてしまう。

「伊織が浮気相手だと思ったんだろうけど、俺不安にさせていたかな？」

「いや、違うの。そうじゃないの。何ていえばいいんだろう。」

私とは、つまり、私には、武人さん触れてこないからってというか、その、つまり」

「・・・他の女性で解消していると思っていたの？」

あ、武人さん、顔 強張った。

嗚呼私は本当に語彙が足りない。

なんて、言えば良いんだろう？私があまりに、セックスを意識しすぎなのかな？

とは言え、自分から行動起こすのは、はしたないと考えてしまう。

「うん。でも、そうじゃなくて。」

私が、つまり、先に進みたいと、思っている・・・んです」

は・・・恥ずかしい！顔があげられない。

早すぎるかな？でも、気持ちはそうなのだ。凄く凄く切望している。

そういえば、武人さんと伊織さんと3人で、食事に行った時のこと。食事の前に、買い物があったと伊織さんが言い、物凄い量と金額で買い物しているのを見たとき、正直クラリとした。身分差を思い知った。

そういえば、と隣に佇む武人さんを見る。

彼と買い物をしていて、居た堪れない思いをしたことは無かったな。武人さんは、慎重な性格で、気に入ったものは気前良く購入する。だけど、迷っている時は買わないで2週間位考えて、それでもやっぱり欲しいと思えば購入するタイプだ。

他の人にとっては、煩わしい慎重さかもしれないけど、私はそうじゃなかった。

彼の、そういう考え方が好きだ、と思った。

穏やかで、慎重で、楽しく一緒にご飯を食べてくれるのが、とても好きだ。

「思うだけじゃ無くって、行動で示して欲しいな」

はっ、と武人さんを見る。

「おいで」

手がさし伸ばされる。

私も手を伸ばして、腕を絡ませ、少しずつ身体を移動させる。彼の顔に、追い被さる様に私の顔を近づける。

恐る恐る、唇を合わせる。彼の唇の感覚をもっと知りたくて、角度を変えたり、舐めたり、啄んだり、吸ったり、甘噛みしてみる。

その間、膝立ちで屈んでいる私の腰や背中に彼の腕がまわり、がちり抱きしめられる。

彼は、私のキスを受け入れてくれて、私に同じことを繰り返してくれる。

夢中になってしまったキスをセーブしてくれたのは、やはり、彼の

方だった。

お互いに、息が切れていることが、唯一の慰めだ。
離れたく無くて、私は彼の首に腕をまわし、膝の上に座り、身体を
押しつけた。

「もつと」

「もつと進んでいいの？」

「もつと。もおつと、先」

気付いたときは、抱きかかえられており、お姫様だっこのまま彼の
ベッドまで運ばれた。

恥ずかしくもあり、初めての不安もあったけれど、
もう心は決まっている。

それから、私たちは

心を込めて愛し合いました。

問題は、穏やかだと思っていた彼が、

ベッドの上では意地悪で、散々泣かされた事

大切な気持ち（後書き）

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。
誤字・脱字等ございましたら、教えて頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2689u/>

穏やかな彼

2011年9月5日20時38分発行